

東京レールゲートWEST 時間読めて自由度高い

1880(明治13)年に大阪で創業した鴻池運輸は、国内外ネットワークを駆使した輸配送サービス、定温物流サービス、倉庫サービスなどの物流業にとどまらず、製造業の一連の工程・業務を担う請負サービスも展開している。さまざまな分野で培ったノウハウを礎に物流と生産現場をつなぎ、効率的なオペレーションを提供している。

鴻池運輸は2020年の東京レールゲートWEST開業当初からワンフロアを貸し切り、営業所を置いている。関東中央支店東京レールゲート営業所の花屋圭佑所長は「従来、私有31ftコンテナを運用し、各地域の事業所でも貨物鉄道を利用していましたが、主はトラック輸送です。2018年当時、繁忙期になるとトラックが足りないなど、ドライバー不足が顕在化していました。お客様に安定的な輸送力を提供できないとなれば大問題です。CO₂排出量削減の観点からも、鉄道利用を増やしていこうというプロジェクトが社内で立ち上がりました。そこで、東京(夕)構内に物流施設が建設されるのに合わせ、鉄道利用を促進する基幹事業所として東京レールゲート営業所を開設しました。輸送の柱をもう1本増やしたいと考えています」と背景を話した。

東京(夕)は高速道路や東京港・羽田空港にもアクセス良い立地。鴻池運輸の東京レールゲート営業所では、各地から到

着する貨物の仕分けや流通加工にも対応する。現在、同営業所から定期的に12ftコンテナで発送しているのは4社。いずれもトラックと併用しており、輸送手段は顧客メーカーまたは鴻池運輸がリードタイムやボリュームにより振り分ける。

「長距離を中心に、リードタイムが合えば鉄道を利用します。例えば全国一斉発売に合



手前が東京レールゲートWEST



鴻池運輸が貸し切るフロア



バースで12ftコンテナへ積載する



レールゲートを出てコンテナホームへ



花屋所長

わせた配送など、複数の仕向け先へ、大量かつ到着日が決まっている場合に鉄道コンテナは向いています。トラック輸送は到着日の前日や前々日に、一気に手配をしないと行けないため、倉庫側の作業が集中します。出庫のキャパシティとして万全な対応ができない可能性もありますし、トラックの待機時間も長くなってしまいます。一方鉄道コンテナはリードタイムの分、出庫作業を前倒しすることになり、結果、作業の一極集中を緩和できます。到着駅で留置も可能なことから、納品日の変更にも対応しやすい」とメリットにも触れた。

鉄道コンテナ輸送は、集貨・鉄道輸送・配達から成る。「コンテナホームが目の前にあるので、利用運送事業者へ集貨を依頼する際



東京レールゲートWESTで

も自由度が高い。信号も渋滞もないし高速道路に乗る必要もない。時間が読めるし、列車の締め切り時間を把握しておけばぎりぎりまで作業に充てられます。リードタイムが1日単位ではなく時間単位で調整できるイメージです」と話した。

取材に訪れた5月中旬、北海道向けの包材を12ftコンテナへ積載していた。

「台風シーズンや雪の季節など自然災害による欠品リスクを避けるため、いったん東京レールゲート営業所に入れていきます。ここからなら輸送障害が発生した際、フェリーやトラックなど代替手配が柔軟に行えます。首都圏は自社含めトラックが多く走っている地域ですから、リカバリー力がある。貨物鉄道の特性を理解していただき、顧客からは安定的に輸送できていると評価されています」と花屋所長。

鴻池運輸の営業部門は、食品関係や鉄鋼関係など顧客の業界ごとに組織づくりをしている。東京レールゲート営業所は食品本部の中にあるが、鉄道利用を促進するため、部署間

の垣根を越えて連携を図る組織も兼ねている。

「お客様が容容拡大する際や改善を望んでいる場合など、鉄道コンテナがマッチする可能性がある。社内部署が連携して情報を集め、鉄道コンテナ輸送や船舶輸送も組み込むことができれば、ビジネスチャンスにつながります。まずは東京レールゲート営業所がトラック以外の輸送モードの知識を持ち、活用できる倉庫になるべきだと考えています」とモデルシフトを推進する姿勢を示した。

ドライバーの年間労働時間上限規制が適用されるいわゆる「2024年問題」についても、「間際になると対応が難しくなるかもしれません。今はお客様と一緒に考える期間と捉え、鉄道コンテナのトライアル輸送を積極的に提案しています。自社だけではなくお客様や他の物流事業者と連携して一斉に発信したり、協業したりすることで、貨物鉄道輸送が広がり、浸透していくきっかけになるのではないかと話した。

鴻池技術研究所イノベーションセンター

鴻池運輸は2021年、東京レールゲート営業所と併設して鴻池技術研究所イノベーションセンターを稼働した。最新自動化機器の開発・導入実験、国内外のスタートアップ技術の実証実験など、物流現場での技術イノベーションを加速させるのが目的だ。「倉庫に併設することで、実際の倉庫レイアウト、実際の環境下で各種自動化機器を試すことができます。お客様も見学に来やすい」と花屋所長。

ピッキングロボットとAMR(自律走行搬送ロボット)の連携による倉庫自動化オペレーションの共同実験検証の様子

